

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 日本独文学会 ドイツ語教育部会

(代表者 太田 達也 会員数 約530人)

T E L 03-5950-1147

1 前 文

現行の高等学校学習指導要領においては、外国語としての「ドイツ語」教育は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うもの」(第2章第8節第2款第7)とされ、ドイツ語独自の指導目標はないが、外国語科としては「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結びつけた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成する」ことが目標とされている(第2章第8節第1款)。本評価書では、共通テスト、の「ドイツ語」の問題が、この高等学校外国語教育の目標に沿う形で作成されているかどうか、また、大学教育を受けるにふさわしい能力を判断する設問になっているかを総合的に評価した結果を報告する。

令和4年度共通テストにおける「ドイツ語」受験者は108人であった。これは、前年度(令和3年度)の受験者数113人に比べると微減しているが、ほぼ同水準である(なお、令和3年度は本試験が共通テスト(1)と共通テスト(2)の2回あったため、単純に比較することはできない)。

平均点は124.26点(100点満点換算値:62.13点)であった。最高点は200点(同:100点)、最低点は32点(同:16点)であった。令和3年度の平均点は119.25点(同:59.62点)であり、このときは旧センター試験から現共通テストにスタイルが変わった初年度であったこともあり平均点が下がったが、今回の試験では一般的な試験の特徴(平均点が65~70点くらいになるように作問されることが多い)に近づいていると言える。標準偏差は49.45(同:24.72)であり、これは得点分布の山が74.81点から173.71点(同:37.41点から86.85点)の間に集まっていることを示すが、この得点分布も想定しうる分布であると言える。

問題形式は、共通テスト初年度の令和3年度に大きく変わり、今回は形式の変更はなかった。しかし、旧センター試験での平均点(200点満点)が概ね150点(平成31年度152.21点、令和2年度147.90点)であったことと比べると、現共通テストの形式では総じて平均点は低くなっている。これは、現行の学習指導要領(上述)に沿った出題がなされた結果、実際のコミュニケーションで必要とされる知識やスキルがしっかりと問われているからであると思料される。その点を保持しつつ、やや平均点が高くなるような問題設定が望まれるが、この出題形式は時代に即した工夫がなされた結果であると言え、評価できる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

大問の構成(大問1~7)、出題形式、総設問数(全51問)とも、昨年度と変わりなかった。ただし、個別に見ると、発音と文法の基礎的理解を問う第1問~第3問の配点は、昨年度は全体の35%であったが、今年度は5点分減り、32%に変更された。今年度は基本的な文法知識よりも、第4問以降の長文読解などの運用能力のほうに比重をシフトしようとした出題者の意図が窺い知れる。第4問は前年度から変更がない。配点は全体の20%である。留学すると誰しもが経験するであろう「ドイツでの住まい探し」がテーマであり、このような場面に慣れてほしいという出題者の意図を

押し量ることもできる。ただ、2020年からのコロナ禍で、ドイツ語学習者は留学をイメージできずにいる。この2年間は海外渡航もままならない状況が続いており、今後はドイツ語圏への留学や語学研修などが再開されることを期待しつつも、共通テストの出題としてはコロナ禍中の受験者心理への配慮を求めたい。第5問も前年度から特筆すべき変更はなかった。配点は、全体の15%である。第6問は、配点が昨年度よりも5点分増えた(第3問で縮小された5点分がこちらに置かれている)。増やされた設問はテキスト全体の内容理解を問う設問で、選択肢は日本語である。6つの選択肢から2つを選ぶ(順不同)問題である。長文を読ませる以上、ストーリー全体の理解を問うことは重要であり、評価できる。配点は30点で、全体の15%であった。寓話のような昨年度の内容と比べると、今年度は人間味あふれるストーリーになり読みやすくなったと思われる。第7問も昨年度と問題数や形式に変更はない(配点35, 全体の18%)。今年度はテキスト全体の内容理解の助けになる選択肢問題がなくなった点と、レム睡眠とノンレム睡眠に関する学術的な読み物になっていることが特徴である。テキストの長さを抑制して、語彙数が増えすぎないように工夫は感じられるが、文を短くするためには語彙そのものの意味に頼る必要があり、そのせいで難語が増えている印象がある。大学でこのような学術記事をドイツ語で読む場面を見据えた狙いは評価できる。

ドイツ語総語数(のべ語数)は1,764, 総語彙数(単一語の初出回数)は584であった。参考までに、令和2年度は総語数1,814, 総語彙数601, 令和3年度は総語数2,144, 総語彙数614であった。今年度は意識して語数・語彙数を抑制したものであると思われるが、その結果難度が高い語が増えてしまっていることが指摘できる。

本評価で使用している過去の出題語彙データベースに蓄積している語、一般的独和辞典(見出し語6~8万語程度)で基礎語彙として扱われている語、基礎語彙を組み合わせた合成語、固有名詞、国際語、注付きの語、派生語のうち形態素の意味からその意味が容易に想像できる語などを除くと、やや難度が高いと思われる語の数は19語であった(★)。

★ Aktivität, Aussage, Badewanne, Bundestag, durchbluten, einschenken, Entspannung, erkranken, Fastenzeit, -jährig, kreativ, Mundart, muslimisch, speichern, Studentenwohnheim, supi, ungeöffnet, Verarbeitung, verlegen

このうちの7語(Aktivität, durchbluten, Entspannung, -jährig, kreativ, speichern, Verarbeitung)が第7問に用いられており、第7問は上で指摘したように、文章量をコンパクトにするのと引き換えに、語彙がやや難しくなっていると言える。ただし、上記19語のうち、Aktivität, Aussage, Badewanne, Bundestag, einschenken, Entspannung, erkranken, Fastenzeit, -jährig, kreativ, Mundart, muslimisch, speichern, Studentenwohnheim, verlegenの15語は、一般的な独和辞典において基礎語彙扱いではないが見出し語としては挙げられている。また、辞書に記載がなく、その意味で実質的な難語といえる4語(昨年度に難語とされた数は9語であった)の中でもdurchblutenは基底語がBlutであると気づけば「血」に関することだけは分かる。出現回数は1回だけであるため、解答には大きな問題はないと思われる。ungeöffnetは、動詞öffnenの過去分詞geöffnetに否定の接頭辞un-がついていると分かればいいが、語形成としてはやや複雑である。これは40の解答に関わるが、テキストの他の場所でnicht einmal geöffnetと言いつけられているため、それがヒントにはなる。supiはsuperの俗語であるが、これは問題を解くのに大きな障害はない。Verarbeitungもこの形では一般的な独和辞典に掲載がないが、対応する動詞verarbeitenは基礎語として掲載されている。基底語がArbeitであることに気づけば、なんらかの「作業・処理」に関わるようなイメージはできたかもしれない。

語彙の点に関しては、全体としてやや難しい語彙が多い印象はあるが、出現回数が1回のみ語が多いなど、解答する上で大きな支障はなかったと願いたい。

以下、大問ごとの評価を記す。

第1問 設問数(7)、頁数(2)、配点(21)は昨年度と同様で、設問も発音に関する小問が3題、文法3題、語彙の分類に関するものが1題と、昨年と同じ構成である。重要な基本事項の理解度を確認するうえで、総じてよく練られた問題である。

問1 子音dの発音が有声か無声かを問う問題である。基本的な単語を含む複合語が選択肢として挙げられている。全体として発音の知識を問うのに適している。

問2 母音uの長短を問う問題である。子音連鎖の前は短母音になるという基本的な発音知識を問う良問である。なお、前綴り(㉒)の知識を問うているところも興味深い。

問3 名詞と形容詞の派生語のペアの中から、アクセントの位置が同じものを選びさせるという、正確な発音知識を問う良問である。

問4 選択肢にある動詞全てに含まれる語幹の長母音eのうち、3人称単数が主語の場合に別の母音に変化するものを選びさせる、動詞の現在人称変化の正確な知識を問う問題である。

問5 選択肢にある動詞すべてに含まれる語幹の短母音iのうち、過去形にした場合に別の母音に変化するものを選びさせる問題である。選択肢にはやや難しい動詞も含まれているが、基本語彙であるtrinkenの過去形を知っていれば正解することができる。

問6 名詞を複数形にしたときに、語尾-eがつくものを選びさせる問題である。選択肢の名詞はどれも日常でよく使用されるもので、名詞に関する正確な知識を問う適切な出題といえる。

問7 グループに分類された名詞に対し、選択肢の中からそれに属さない名詞を選ぶ、工夫された良問である。出題に使用された名詞の難度も適切である。

第2問 設問数(8)、配点(24)、出題形式のいずれも昨年度と同様である。基本的な文法や語彙の知識を問うパートである。全体として適切な難度であると評価する。

問1 前置詞の格支配の知識と、名詞Studiumの文法上の性の知識が必要となるオーソドックスな設問である。

問2 再帰動詞sich beeilenに気づかせ、適切な再帰代名詞を選択させる問題である。出題の狙いも明確である。

問3 適切な関係代名詞を選択させる問題である。先行詞Weihnachtsliedの性別の知識がなくとも、主文で4格目的語の形でein Weihnachtsliedとなっていることから中性名詞であると分かり、その上で関係代名詞dasを選びさせる仕掛けになっており、良問である。

問4 いわゆる「代価のfür」を選びさせる問題であり、基本的な表現を問うている。

問5 助動詞werdenと共起するのは、不定詞(未来形)か過去分詞(受動文)のいずれかであり、選択肢が絞られる。動詞の意味から受動文が望ましいことが分かる。なお、話法の助動詞があることによって未来形が排除されるため、正解を選択するのに文の意味を理解していなくてもいい。

問6 現在完了形の助動詞としてhabenを選択するかseinを選択するかを問う、基本的な問題である。動詞besuchenが他動詞であり、他動詞はすべてhaben支配であることを確認させる良問である。

問7 名詞Mantelの意味や文法上の性を知らなくても、これが1格(文の主語)であること、かつ、冠詞がdieserであることから男性1格に付加される形容詞の弱変化語尾が問われていることに気づくことができる。文法知識がストレートに問われる良問である。

問8 切符を買うときの「往復」の表現を問う、語彙(表現)の知識を問う基本的な問題である。

第3問 昨年と比べると設問数が1つ減り、設問数は(4)、配点(20)となった。出題形式は昨年同様、6つの選択肢から5つを選び空欄を補う形式である。語彙の選択と難度は適切である。

問1 ab morgenを正解するのは難度が高いが、zu Fuß(徒歩)という慣用表現が分かれば、残

りの選択肢から選ぶことができる。同時に、従属接続詞weilが導く副文を正しい語順で作れるかを問う良問である。

問2 schwimmen gehenという複合的な動詞を正しくzu不定詞にできるかを問う基本的な問題である。nachの直後とmitの直後に入る語句については、前置詞の意味が分かれば適切なものを選ぶであろう。

問3 従属接続詞dassが導く副文を正しい語順で作れるかを問う基本的な問題である。nächste Wocheがここでは副文の主語の前に置けることに気づけるかが重要である。

問4 sicherの意味が分からなかったとしても、語法の助動詞kannが文末に来る副文を作ることができ、wieの位置が分かれば、それほど難しくはない問題である。

第4問 設問数(8)、配点(40)は、昨年度と同じである。連続性のある3つのダイアログの内容理解を問う形式であり、トピックはドイツでの住まい探しという学生に身近な話題である。3つのテキストは連続性があり、WGを探す前の会話、WGを見学、実際に住んでいる学生との会話など、時間的な経過を把握しやすい構成となっている。WGに住む学生の多様性とその文化的側面に触れるなど、興味深い内容である。全体的に日常的な口語表現が多い印象である。なお、WGというテーマは日本の高校生には想像がつきにくく、やや大学生向けの内容と言える。

問1 sich bei 3格 beschweren, nichts bringenの意味を推測するのはやや難しいが、前後の文脈を手掛かりに、正解を選択できると思われる。

問2 直前の発話でMikaが探しているのはWohnungであると発言していることと、beiの意味を正しく理解していれば解ける良問である。ただし、出題文に「下線部㉔の時点で」とあるが、Mikaは一人で住みたいと思っておりWGを希望しているのではないことは、6行先まで読まなければ明確には分からない。その点は改善が必要と思われる。

問3 WGを見学するかどうか迷っている登場人物を安心させる一言を選ぶ問題である。受験者にはこのような日常表現に慣れてほしいという意図を感じることができる興味深い問題である。

問4 ひとつめのダイアログの内容を把握できていれば解ける。後続の発話にruhige WGとあることも、選択肢を選ぶ上でヒントとなりえる。良問である。

問5 後続の会話はコーヒーを勧められる場面に切り替わってしまうなど、前後の文脈に手がかりが少ないため、sich teilenとHausarbeitの意味を的確にとらえなければ正解を選ぶことができない。Hausarbeitという語が持つ複数の意味のうちここで問われている意味を、「家探し」という全体のテーマから導き出させる興味深い設問である。

問6 muslimischやFastenzeitなどのヒントとなる語はあるものの、ラマダンの内容と選択肢にあるreligiösの意味が分からなければ、正解を選ぶことが困難である。

問7 wie以下の副文を前文とつなげることでより文意がはっきりしたのではないか。RücksichtはB1レベルの語で、rücksichtvollも難語ではあるものの、一連の会話から類推できるかを問う工夫が見られる。

問8 テキスト全体で述べられていることを視覚的に整理するような興味深い問題である。しかし、言語能力とは関係のない空間認識能力(図面上の左右の認識)も必要とされるため、図の上下が反対のほうがよかったのではないか。

第5問 設問数(6)、配点(30)は昨年度から変わらない。テキストの種類は、大学が提供するスポーツ・コースの検索・吟味をする大学生2人の会話と、会話中に共有するインターネットからの情報、参加申込後の受信メール、2人の間のチャットで、昨年度とほぼ同じ構成である。ただし、申込前後の2場面から構成されている点は異なる。会話テキストは30行、約195語、インター

ネット情報は2種類各3行で13語と15語、メールのテキストは13行、78語、チャットは吹き出し8つ、32語で、総語数は昨年度とほぼ同じである。会話の内容や流れがドイツ語圏での実生活を意識している点も昨年同様である。設問は会話とメールの内容の双方に目配りをしながら正確に把握する能力を試すものである。

問1 下線部後のKathrinの発話内容を正確に理解できているかをはかる問題である。sich den Finger gebrochen habenが①sich verletzt habenに相当することが分かるかが鍵となる良問である。

問2 前置詞ohneの意味と、下線部前後の会話の流れを理解する必要がある。選択肢にある慣用的表現の理解も求める良問である。

問3 34以降の会話とインフォーマルな時刻表現の理解が必要となる良問である。

問4 設問を読み違えないよう太字を使用している点は良心的である。2つ目のインターネット情報のあとの会話の内容を正確に理解する必要がある。

問5 受信メールにあるausfallen, ②verlegen, ④stattfindenの意味が分かるかが鍵となる。難度がやや高い。

問6 会話テキストの内容を正確に理解している必要がある。問4までの解答では触れられてこなかったZumbaに関する会話内容の理解がここで生きてくる点は興味深い。よく練られた設問である。

第6問 設問数は昨年度より1問追加の(5)、配点は昨年度より5点追加の(30)である。語数は約260で昨年度と同じである。テキストは、ヘーベルの『暦物語』を参考にした読み物で、銀貨を失くした金持ちの男と発見者のそれぞれの主張、裁判官の判決を理解する力が試される設問となっている。本稿冒頭の語彙難度で列記されている語彙のほか、Beutel, Belohnung, Ehrlichkeitや過去分詞の意味が分かるかどうかは鍵になるが、設問2、設問3はテキストの登場人物、論点、ストーリー展開を推察する手がかりになる。ストーリー展開は捉えやすい。

問1 ストーリー展開の理解が必要となる。テキストにあるerkennenに相当する③のdurchschauenや④merkenが理解できるかは鍵の一つではあるが、選択肢の各文に対応する本文中の各人物の言動は容易に理解できる。

問2 テキスト第2段落の内容を正確に理解していることが求められる。金持ちの男の主張として選択肢に挙げられている一文はテキストからほぼ同一の文が抜き出されたものであることから、比較的容易に正解を選ぶことができる。発見者の主張は、ungeöffnetがnicht aufmachenに相当することが分かるかが鍵となる。

問3 金持ちの男と発見者の主張が食い違う点、テキスト3段落目8行目から10行目までの裁判官の説明内容を理解しているかを問う設問である。選択肢によって判決、判決理由が異なるため、受験者はテキストを正確に読み解くしかない。やや難度の高い問題である。

問4 裁判官が金持ちの男と発見者のどちらの発言を正しいと見抜いているのかを推察した上で、下された判決を理解しているかを確認する興味深い問題の形式である。ただし、in die Knie sinkenやvor Freude aufspringenなど選択肢に使われている語彙や表現は平易ではなく、難度の高い問題である。

問5 テキストの内容理解を問う設問である。正答の③と④は同じ事実を異口同音に述べているようにも見えるため、選択肢に一工夫が必要ではないだろうか。

第7問 頁数(4)、配点(35)、設問数(7)はいずれも昨年と同様だが、本文は28行、総語数268語と、昨年度の398語から大幅に短くなった。テキストの題材は昨年度の現代ドイツ社会における複言語主義の現実であったのに対して、今年度はレム睡眠とノンレム睡眠の役割について書かれ

た脳科学分野に関する内容である。一見難解なテキストに見えるが、睡眠のメカニズムという比較的身近なテーマであることに加え、複雑な構文や文章理解を困難にするような難語を極力避ける工夫がなされている。内容的にも言語的にもおおよそB1修了レベルを想定していると考えられ、大学入試問題として適切な難度にまとめられている。また、設問も長文理解を問う典型的な形式で、比較的正確を導き出しやすいものになっている。興味深いのは、このテキストには出典が挙げられていることである。これは、受験者の指導や日常の授業に携わる教育関係者にとって大変参考になる。

- 問1 テキスト第1段落にある90-Minuten-Rhythmusの意味を前後の文脈から正確に理解することが重要になる良問である。
- 問2 第2段落で説明されている、ノンレム睡眠時に見る夢の特徴がnäher an der Wirklichkeitであることを読み取り、それと同等の表現を選ぶ問題である。易しい問題とは言えないが、段落全体を十分に理解していれば解くことは可能である。
- 問3 睡眠時の脳の活動の度合について説明している第3段落の内容理解を問うている。テキスト本文にはdurchblutenという難語が入っているが、それ以降の内容が把握できれば、正確を導き出せる。
- 問4 第5段落の、ノンレム睡眠が果たす体力回復機能についての事例を正確に理解できているかを問う問題である。この段落は4行と短く、文脈から理解の助けを得にくいため、körperlich wieder herstellen, nicht besonders viel Ruhezeitや選択肢の中のErholungといった難しい表現を理解できるかが重要になる。
- 問5 問4と同様に、ノンレム睡眠の役割を問うている。4つの選択肢のキーワードlernen, konzentrieren, Körper, Gedächtnisについては、それぞれ第4、第5段落で言及されており、この2つの段落を正確に理解できているかが問題を解く鍵である。ただし正確は第5段落の理解にかかっているため、短い段落の理解について問4、問5と連続して問う形になっている。設問(出題)バランスに疑問が残る。
- 問6 睡眠のメカニズムと学習の関係について書かれている第4段落の理解を問う問題である。目を引くのは、第7問において、この問6の選択肢だけが日本語になっている点である。昨年度は、文章全体の理解を試す問7の選択肢が日本語であった。やや難解な第4段落の理解を助ける意図だと思われるが、問題を解く作業の流れを考えると、設問、選択肢ともにドイツ語でもよかったかもしれない。
- 問7 文章内容に合うタイトルを選ばせることで、テキストの大意の把握を試す良問であるが、③のJunge Menschen brauchen nicht viel Schlaf. については、再び第5段落を正確に理解していなければ、誤って選んでしまう可能性がある。このようにテキストの後半部分の内容理解が重要になる設問が多く、設問のバランスに若干の疑問が残る。

3 ま と め

今年度の共通テスト「ドイツ語」は、平均点が昨年度よりも上昇した。旧センター試験から現共通テストに変わるにあたり出題形式が大きく変わった昨年度と比べると、今年度は出題対策ができたため、出題形式に惑わされず受験者が力を発揮しやすかったかもしれない。テキストの分量が多くなることで受験者の負担が過度に大きくなるよう語数を減らす工夫も見られる。ただし、語数を減らすと、一語あたりの意味に依存する比率も高まるため、より語彙力が問われる問題になることには注意したい。昨年度の出題は、登場人物の心情を推し量るような、あるいは非現実な空想物語を読み解くような、ドイツ語圏の“国語”の授業で必要とされるような力を問う出題が見られた

が、今年度はそのような「押し量る」問題はなく、文章の中に書かれている情報を正確に読み取ることが求められる出題になっている。テーマとして、ドイツでの住まい探しや、大学で開講されている科目（スポーツ）をめぐる会話など、高校生が大学に入り留学等を見据えたときに役立つ、実にリアルなシチュエーションが扱われていることが特徴と言える。これは、学習指導要領にも則した、また時代に沿った出題であり、評価すべき点である。テーマ選択に際しては、CEFRに準拠する若者向けの総合学習教材などを参考にすることも一案である。

外国語で書かれたテキストにおいては「～すべし」「～してはならない」「AならばBだ」「私は～したくない」というような主張・論理構造が顕示的であり、日本語のテキストのような「ハイコンテキスト」（行間を読ませる）にはなっていない。日本語のテキストとは違うスタイルで書かれたテキストを読むことで幅広い思考を涵養することができる。外国語は何も英語だけではない。今後も英語に偏りすぎず、複言語による外国語教育が展開されるためにも、共通テストにおける「ドイツ語」の果たす役割は大きいと思われる。